

Q: 昨年度から小学校5、6年生で検定教科書を使って授業を行うようになりましたが、英語でのコミュニケーション能力や対応能力が育っているかどうか疑問を覚えます。教科書を効果的に使うにはどうしたらよいのでしょうか。

佐藤 玲子

A: 検定教科書は言語活動(skill using)や練習活動(skill getting)のための様々なアイデアを提供してくれていますが、それを活用する・しないの選択や使用順序は、教員が考える授業構成に沿って自由に考えてはいかがでしょうか。教員は教科書に用意されている活動をすべてこなそうと考えず、先ず、その単元や授業のねらいを明確にしておくことです。そして、教科書をなぞって指導するだけでは紙面上の2Dの活動で終わってしまうので、児童の心が動きやすい、頭と体を使った3Dの体験活動にしていくのです。

道案内のための基本表現が導入された後の活動例を紹介しましょう。どの教科書にも道案内の単元があり、Where is the ...? Go straight. Turn right/left. Stop.等を学習しますが、地図上で道案内をするだけでなく、実際に児童が案内する活動を入れるのです。教室の机を移動して机のブロックを作り、出発点からゴールまでを目隠しした教員が机にぶつからないように、児童は案内していくという活動をしました。児童たちは、机にぶつからないように案内するには上記の学習した表現だけではうまく案内できないので、歯がゆい思いをしていました。児童が使いたい・知りたいと思った表現(“One step, back.”、“Go straight one small step.”、“Turn right/left slightly.”、“A little.”)を絶妙なタイミングで教えると、児童の言語使用は自発的でとても活発になり、それらの表現はすぐに覚えてしまい、その後の授業でも使っていました。

もう一つ例を示しましょう。練習活動で学習目的表現を覚えてから、最終段階で言語活動をするという単元計画や授業計画が多く見られます。そして、単元の最終段階になっても、児童は覚えたことを言うだけで精いっぱいという授業を見ることがあります。それは、学習目的表現を覚えるということに主眼が置かれ、コミュニケーションをとるためにことばを使うという活動が最終授業までなかったため、この表現をどうしても使いたいというニーズが児童の心に生まれてこなかったのです。そしてコミュニケーションを続けるために、困った時にどう言えばよいかを考え学ぶ機会がなかったということでしょう。決まり切ったやり取りを失敗なく行なわせようと指導するのではなく、児童が少し躓いても・間違っても良いからやらせてみて、児童自らうまく伝えるにはどうしたらよいかを考える機会を設けることが、コミュニケーション能力をつけるには必要だと思います。

最終授業でだけではなく、単元を通して実際にことばを使う、そして、使いたいという心が伴う言語活動の体験がないと、ことばは生きたものになりません。教員は、児童がどのような時にその学習目的表現を使う・使いたいと思うかを考え、児童が思いを伝えるための英語を自ら考え求める機会を作りましょう。

(研究所研究員/明星大学)